

EurekaXIII

六年制通信 No.15 令和7年7月11日(金)号

秒読み

私の尊敬する藤井聡太七冠は対局のほとんどがタイトル戦という、一局一局が重い意味を持つ戦いばかりしているわけですが、あの若さでどうして常に冷静で謙虚で平常心でいられるのか不思議です。タイトルに挑戦してくる棋士は予選を勝ち上がってくるその時々最強の棋士で、十分な研究をして対局に臨むのですから受けて立つ藤井七冠は大変です。それで今年度、今までのところ8勝1敗。この強さ、一体どうなっているのでしょうか。将棋はだいたい百手前後で終局するので、自分が指すのは五十手くらいです。その時その時の局面で最もいい手を「最善手」と言うのですが、藤井七冠は他の棋士よりも最善手を指す確率が高いから強い、一般的に考えればそういうことになります。特に終盤が圧倒的に強いと言われています。しかしそんな彼でも一局のうちには悪い手(悪手と言います)を指してしまう時があります。どんな棋士でもいい手も指せば悪い手も指します。この間、タイトル戦を観ながら、誰でも百点の人間はいないのだなと、そんな当たり前のことを考えていました。

池波正太郎が自らの書いた小説の主人公に語らせています。人というのは善いことをしながら一方で悪事を働きもする、悪いことをしながら善い行いもする、根っからの善人も根っからの悪人もいないのさ、と。まことにその通りですね。百点の人間はいないということでしょう。芥川は『蜘蛛の糸』で極悪人のカンダタでさえ昔小さな蜘蛛の命を助けたことがあること、そしてそれをお釈迦様は覚えておられるということを書いています。考えさせられる小説ですね。

さて、藤井七冠の対局を観戦していて考えさせられたことがもう一つあります。対局には持ち時間というのがありまして、二日制なら8時間とか、一番多いのが名人戦の9時間ですが、一日で決着がつく対局なら5時間とかね、その持ち時間を使い切ると一手1分以内に指さないと反則負けになるのですね。そして、記録係の人が読み上げるのですよ、秒を。「30秒、40秒、50秒、55秒、6、7、8、9…」と。これを秒読みに入ると言います。58秒くらいで指されると、観ている方はわくわくするのですが対局している方は大変ですよ。時には自分が秒読みで相手は1時間以上持ち時間が残っているという場合もあります。ミスの許されない場面で秒読みになるわけですから気絶するくらい緊張すると思うのですが、棋士は慣れているように見えます。

それで、考えさせられたことですが、秒読みに苦しむ棋士を見ていて改めて「時間とは命である」と思ったのです。命を削って対局をしていると、そう見えたのです。彼らは将棋に魅せられて、人生のほとんど全てを将棋に捧げてきた人たちです。最近藤井

七冠のタイトルに最も多く挑戦しているのが永瀬九段ですが、彼は将棋をするために生きているのであって、生活するために将棋をしているのではないと言い切っています。怖いくらいの没頭ぶりですね。永瀬一将棋＝0 だそうですから。こうなると永瀬九段の将棋は命そのもののものですから、彼が将棋のために使う時間は命そのものの燃焼であり、そのことを彼自身も本望としているわけで、そう考えると羨ましく思います。同じ生き方はできないと思いますけどね。

『星の王子様』のくだりでも書きましたが、私たちは時間をかけた分だけその対象に愛着を持つようになり大切にします。時間をかけるということは命を削るのと同じ意味だと思うと、そのことに納得がいきませんか。自分の命と引き換えにつぎ込んだ時間、そのことで得た知識とか技能とかを大切にしようとするのはいたって当たり前と言えますからね。見方を変えると、時間をかけて取り組む対象を持てるというのは、実に幸せなことだと言えますね。君たちもそんな対象を見つけてほしいと思います。

考えてみるまでもなく、どんな人にも共通に与えられているものが時間です。一日が 24 時間というのはどんな境遇の人にとっても同じです。しかし、そのフルタイムを自分の意志で使えるかどうかは人によって違うかもしれません。君たちでさえ、様々な都合で自由時間に個人差があるかもしれませんね。しかし、少なくとも学校にいた間は全員に同じ時間が流れているはずですよ。授業の 50 分が君たちにとって命の 50 分であることは同じです。それを意味あるものにするか、無駄にってしまうかですが、ただの 50 分と捉えずに「命の 50 分」だと意識すれば、同じ 50 分が今までと違って見えてくるのではないかと思います。無駄にするなど、とんでもないですよ。

今週のおすすめ

・TBS テレビ報道局編 『余命 1 か月の花嫁』 (マガジンハウス文庫)

映画にもなりましたね。柴倉奈々さんでしたよね、主演は。私は映画の前に TBS のドキュメンタリーも観て、千恵さんのことは知っていました。24 歳はあまりにも若すぎます。若いと癌の進行が速いとは聞きますが、胸にしこりを見つけた段階ですぐに処置していればとの思いは残りましたね。心の支えの太郎さんもたった一人の肉親である父親の貞士さんもさぞ辛かったろうにと、ちょっと言葉を失うほどの実話です。千恵さんの頑張りや友人たちの奔走もあって、ウェディングドレスを着たいという彼女の望みは叶います。それ以上のサプライズを伴って。

その教会のシーンですが、酸素ボンベの管を外し車椅子から立ち上がり父親とバージンロードを歩きます。太郎さんが待つ祭壇まで。とても立って歩ける状態ではなかったのに、です。私、こういうところに神様の計らいを感じます。もちろん、その後体調は悪化するに違いないのですが、それでも一瞬の生の輝きを千恵さんに贈ることのできるの、人知を超えた存在しかいないだろうと思います。

乳房切除から再発までの短い間にシステムエンジニアの予備校に通う場面が描かれています。あれも彼女の生の輝きだと感じました。是非ご一読を。

BGM は 八神純子 の 雨の日のひとりごと でした…。